

『老荘とその周辺』

吉元昭治 著

東洋医学を専門にしている小生のよう
な人間にとって、中国思想は必須の学問
である。とりわけ儒教と道教の思想は、
実際の臨床と関連している部分があり、
どうしても知っておく必要がある。

そのうち儒教は、古代より医学と密接
な関係を持ち、宋代の朱熹の理学（朱子
学）の出現以降、中国伝統医学に影響を
与え続け、金元時代に四大家を生み出し
たあともこの医学の理論的な基盤となっ
た。現代中医学もその影響下にあるとい
って過言ではない。

一方、道教は、その出発点である老子・
荘子に基礎をおきながら、さまざまな土
俗的な思想を取り込んで、漢代には本草
と結びつきを強め、六朝時代には陶弘景
や葛洪など著明な医家の研究の対象とな

った。神仙思想の導入もこの頃である。
唐代になってからは国家的な規模で信仰
され、以後も中国歴代王朝と深い関係に
あるのみならず、不老長寿、現世利益を
目的とする宗教として中国人の生

評 安井 廣迪



現代中医学の基盤を解明

活に深く入り込んでいる。

本書は、その道教と、その源と
なった「老荘」とがどのような関
係にあるかを、著者の視点で解き明かそ
うとするものである。

吉元先生は、道教の源泉を探ると共に、
これが中国伝統医学と極めて密接な関係
にあることを、両者の重要文献にある共

通の文章から明らかにし、更に、道教に
おける生理学的基礎である「精」「氣」「神」
について述べる。この視点は、漢方医に
は新鮮なものであろう。朝鮮の医祖のよ
うな存在である許浚（ホジュン 1539～
1615）が著した『東医宝鑑』の冒頭が「精」
「氣」「神」に関するものであることは、
道教を理解して初めて納得できるもので
ある。欧米ではタオイズムとして同一視
されている道家と道教の違いも、この学
問を研究する上で極めて重要である。

本書の第四部と第五部は、古代の文字
を追いかけ、そこから老荘の源に迫ろう
という試みからなる。といっても、しか
めつ面らしい議論が繰り広げられるわけ
でなく、順序を踏んで初学者でも易しく
たどれるような論旨となっているのは、
ライフワークともいえるべき著者の道教研
究の経験の賜物であろう。この周辺の領
域に興味をお持ちの方や医学思想の研究
家には格好の読み物であると思う。

（たにぐち書店・4000円＋税）